



新潟大学広報誌

新大広報

# Niigata University Campus Magazine

2006年早春号

**No.159**

特集

## 新潟大学への 想 ～旅立ちの日～

学長からのメッセージ

CAMPUS INFORMATION

卒業制作展

shindai NEWS

全学講義開講

「daily」関口優希

## 卒業生、大学院修了生及び 退職される教職員の皆さんへ



新潟大学長  
長谷川 彰

平成十八年の早春に新潟大学を卒業される皆さん、大学院を修了される皆さん、ならびに新潟大学を退職される教職員の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。

卒業生ならびに大学院修了生の皆さんは、これまでの学究生活を通して、学問の深遠さと厳しさに触れられましたが、今後どのような道に進まれようとも、学問に対する真摯な姿勢を保持していただきたいと願っております。また、皆さんがこれまでに得た成果や、新しい発見に遭遇したときの感動を若い世代に伝えていただきたいと思います。

現代のように社会情勢が大きく変化し、このところ明るいきざしが見えたとは言え、依然として経済が低迷する時代にあって、皆さんには、自らの専門とは異なる分野へも挑戦するたくましさを持っていただきたいと思います。このような勇氣は、新たな可能性を切り開く契機ともなり得

るものであります。常に新しい知識を吸収しながら、新しい価値を創り出し、自己を改革していく自律的な姿勢を持ち続けていただきたいと思います。

今後とも常に新しい知識を吸収しながら、  
自己を改革していく自律的な姿勢を  
持ち続けていただきたいと思います。

皆さんには、自信と誇りを持って、地域社会や国際社会における多様な場で活躍し、それぞれの立場で社会に貢献しながら、自立して生きる力を培っていただきたいと思います。また、社会に対する責任を自覚し、より高い公共性と倫理性を身につけ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、さらには改善していく気概を持っていただきたいと願っております。

退職される教職員の皆さんは、永年にわたり新潟大学の発展にご尽力いただきました。五十嵐キャンパスへの統合移転、国立大学の法人化など、数々の局面において新潟大学を側面から支えてこられた皆さんに、あらためて深く敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。今後とも健康には十分に留意され、ますます充実した日々を過ごしていただきたいと思います。

法人化二年度を迎えて、国立大学法人評価委員会による初年度の活動に対する評価が実施され、非常に高い評価を得ることができました。また、これまでの改革推進に対しては、概算要求を通じて文部科学省からも多大な支援を受けることができました。これらの成果は、皆さんをはじめとし、本学の教員、事務職員等すべての構成員が一丸となって努力していただいた賜であると心より感謝いたしております。

国立大学法人という新しい制度の基盤を確固たるものにすべく、これからも不断の改善に努め、教育研究活動の質の向上を図らなければならないと考えております。また、学外の方々の意見に耳を傾け、より社会に開かれた大学を目指していきたいと思っております。今後とも教職員一体となり、これまでの取り組みを着実に軌道に乗せていきたいと思っております。

新潟大学は、これまで以上に社会からの理解と支援を必要としております。周到な準備期間を経て、いよいよ平成十八年四月に新潟大学全学同窓会が正式に発足する運びとなったと聞いております。卒業生と大学院修了生の皆さんにおかれましては、これからは同窓会活動などを通して、新潟大学を力強く支援していただきたいと願っております。また、退職される教職員の皆さんにおかれましては、新しい新潟大学の発展ぶりを温かく見守っていただきたいと願っております。

ここに人生の一つの区切りを迎え、新たに出発される皆さんに、あらためて心よりお祝い申し上げます。

時代の変化に合わせて  
積極的に社会を支え、  
さらには改善していく気概を  
持っていただきたいと思ひます。

特集

# 新潟大学への 想い

～旅立ちの日～

## 退任する教授からメッセージ

長年にわたってさまざまな研究を行い、学生たちに多くを伝えてきた先生方。  
今年退任される先生方に、新潟大学への想いを語っていただきました。



### 退任に際して

■教育人間科学部教授  
鈴木 郁夫

新潟大学に赴任することが決定して、新潟市旭町通の教育学部に挨拶に来たのが1970年2月25日であった。自然地理学(地形学)を専攻しているにもかかわらず、新潟県はすべて豪雪地域であると思っていたので、当日は長靴を履いていかなければならないかと考え、新津出身の同級生に聞いたところ、新潟市は普通の靴でも大丈夫とのことであった。あれから早いもので36年が経過したことになる。自分の調査に加えて、長期の海外調査、共同調査、委託調査などもあって、年に60～120日間も外に出ていたせい、あつという間に年月が過ぎ去ったというのが実感である。赴任するまで、私にとって新潟県は未知の地域であったが、現国土交通省の土地分類基本調査(1973～2005年)、尾瀬総合学術調査(1993～1998年)などに関わったので、県内のほとんどの地域に行くことができ、多様な自然に触れることができた。

赴任当時はまだ全国の学生運動の名残が見られ、事務室の真上の2階にあった研究室の窓は、学生の投石によってほとんど破壊され、ベニヤ板で補修されていた。当時は学生とそれほど年齢差もないので、いろいろなことでよく議論をしたが、そのうちに年齢差が大きくなり、共通

一次、センター試験が行われ、とくに平成になってからは学生気質も激変したためか本質的な議論はほとんどなくなった。ただし、研究室所属の学生諸君とは新潟県だけでなく、日本の各地に野外実習で長期間出かけたりしたので、親しく話をすることができた。夏休み期間を利用した約1週間の調査は、一昨年まで35年間も続いたので、中部地方以北の多くの地域を知ることになり、炎天下でのそれぞれの調査はつらく、その後の報告書の指導も大変であったが、今はそれらが楽しい思い出となっている。

教育学部は新潟・長岡・高田の統合、引き続いての大学院設置、学部再編(教育人間科学部)、さらに独法化など存亡にかかわる非常に大きな問題に対処してきた。新潟大学はこれからも多くの試練に立ち向かわなくてはならないと考えられるが、魅力ある大学として飛躍して欲しい。

最後に、在職中ご指導、ご支援を賜りました教職員、学生の皆さんに深く感謝し、新潟大学の発展を祈念します。長い間、ありがとうございました。



善光地震の痕跡



### 大学変革の流れの中で

■教育人間科学部教授  
竹田 信彰

「思い出」を記す時よく聞く言葉は、「この期間は、長くもあり、短くもあった」という言葉である。いざ自分の番が来てみると、やはり実感となって感じられる。

昭和41年4月、旧教育学部高田分校に着任して以来、気が付くとこの3月で退任を迎えることになった。40年は長くも又短くもあったということか。

最初の数年間は教育と研究に無我夢中であったが、そのうちに大学の自治をめぐる、大学と学生間で大きな論争が起こり、終日激しい議論が展開され、授業も成立しない日々が続いた。今思い出してみてもあの紛争が何か新しいものを残したのか疑問が残る。

次に強く残る思い出は、教育学部が新潟、長岡、高田の三地区にあり、これを統合する問題であった。三地区の主張は激しく衝突し、現在の新潟に統合される点に用いた時間と労力を思う時、とても感慨深いものがある。

次に心に残るのは、大学院設立の準備であった。学部教育だけでは優れた教員養成は不十分ということで、最初二年課程の大学院の計画が行われ、連日新カリキュラムの原案作りと修正がくり返される日々が続いた。

最後に経験した大きな変化は、独立法人化への大学の移行であった。これから先も大学は多くの変化を続けるのは当然であろう。しかし願いたいのは、それが大学、教員、学生にとって内容豊かなものになってほしいことである。



### 新潟大学の 未来を信じつつ

■教育人間科学部教授  
萩野 敏夫

新潟大学には三分の一世紀もの長き間お世話になりました。着任したのは教育学部長岡分校、昭和48年でした。当時教育学部は三つの分校に分かれており、長岡分校は中でも最も規模が小さく、戦後の横浜で焼け跡に建てられた小学校のバラック校舎を経験した身にも、古い木造2階建ての校舎を初めて見たときは正直驚きました。一般教養科目2コマと専門講義2コマ(1コマは新潟校で)、それに学生実験2コマをすべて通年で担当し、もちろん研究環境など良からうはずはないのですが、不思議に閉塞感のない日々でした。今から思えばちょうど高度成長の加速期でもあり、大学も行政もとにかく教育・研究環境を良くしようと言う姿勢があったのを感じていたためかも知れません。授業は戦前の全体主義の反省から教員一人一人が主体的で創造力のある専門職としての力が必要ということで、教員養成課程ではあるが他の理系学部と変わらないレベルで専門中心にやってくださいと言うのが主事や先輩教員のアドバイスでした。また、学生も他学部に負けなように専門分野を修めたいという気風があったように思います。昭和56年に念願の学部統合が実現し、五十嵐地区で他学部の先生方の協力、支援も得られるようになり、実に恵まれた環境が整いました。おかげさまで化学の研究も自分なりに進めることも出来、無事今日まで充実した日々を過ごすことが出来ました。

着任当時はほとんど無限とも思えた歳月も、過ぎてしまえばまことあつけなく為さざる業も多く残る想いもありますが、大きく旋回している時代の変わり目にあつて新潟大学の未来を信じつつお別れしたいと思います。



## 新潟大学への 想い ～旅立ちの日に～



### 退任にあたって

■教育人間科学部教授  
岡野 崇彦

1979年教養部に着任し、その後1994年に教育学部に移籍、1998年学部改組に伴って、教養部から移った体育教員中心に健康スポーツ科学課程が発足するまでは、専ら教養教育（現Gコード科目）の体育科目を担当してきました。

1998年から始まった健康スポーツ科学課程学生教育研究指導は、新課程の発足に伴う苦労があったものの、周囲の若いエネルギーに揉まれながらの、あっという間の時間でした。

永く担当してきた教養教育体育科目の授業においては、「生涯において心身の健康に責任を持つ」をテーマに、いろいろな学部のフレッシュマンと共に身体を動かしながら「身体・健康・スポーツ」等について語ってきました。受講生の声に「もっと自由にスポーツをやりたい」がありました。ならば各自の自由時間にスポーツを行えばと勧めましたが、そのスポーツ環境やプログラムはというと、学内では残念ながら不十分と言わざるをえません。

健康スポーツ科学課程の発足に伴う、高いスポーツ技能を持った入学者の活躍は、幾つかの部活動の活躍に現れているようです。しかしさらなる活躍をねらって練習時間、場所の確保となると、現在の大学のスポーツ環境は、スペースや時間等の増に厳しいものがあります。

地域スポーツ支援論の講義で、「大学スポーツが地域社会にどのように貢献できるか」を、学生と共に考えてきました。学生が近隣の小中学生のスポーツ指導、交流等に出向く具体的な活動もあり、これらの活動がより発展することを念じています。

スポーツのある豊かな社会づくりのために、地域社会とも連携した大学のスポーツ環境を素晴らしいものに整

備したい、と思いつつ今日を迎えてしまいました。次は、地域住民の一人として大学のスポーツと交流させていただきたいと思っています。お世話になりました皆様、ありがとうございました。



### 新潟大学を退任するにあたっての思い

■経済学部教授  
川村 宣元

昭和50年、前任校の東海大学から新潟大学への赴任がきまったときには、周囲から「あんなに雪深いところに行くの？」と心配されたものだった。ところがいざ住み始めてみると、海岸の新潟市は雪も少なく、そのうえ米はよし、酒はよし、魚はよしで3拍子揃って、酒好きの私には願ってもないところであった。だから個人的には快適にかつ満足しながら過ごすことができた。ただ大学自体には大きな変化があった。最近の法人化はもちろんであるが、私にとっては平成6年の教養部解体のほうが大きな出来事である。なにしろ私はドイツ語教師として教養部に赴任したのである。それが20年目にして突如教養部がなくなり、同僚たちはいろいろな学部に分属し、私も経済学部配属となった。それまでと同じく教養部のドイツ語を担当するとともに、なんらかの専門科目を担当すべしとのことで、私は新設の「異文化コミュニケーション論」なる講義科目（半期）を担当することになった。私の専門であるドイツ語学と異文化とは無関係とは言えないが、専門外のことであり、最初の年には講義の準備で大変だったことを思い出す。なんとか無事にやってこられたのも経済学部でも良い同僚たちにめぐまれたおかげと感謝している。ただこのごろときどき、教養部をなくして大学にとってどんないいことがあったのだろうかなどと考えると、教養部時代のことが懐かしくなるのは、やはり年のせいなのだろうか。



### 定年退職を迎えて

■経済学部教授  
佐藤 正

私は昭和47(1972)年に新潟大学併設商業短期大学部(商短)に採用になり、平成6(1994)年に商短の経済学部・法学部の夜間主コースへの改組に際して、経済学部に移ってきました。商短は、勤労者のための夜間の教育機関であり、かつては高卒就職者が昼間の勤務の傍ら夜間勉学に励む場として盛況でしたが、わが国の経済の発展とともに4年生学部志向が高まる中で、両学部の夜間主コースとして4年制課程に改組されました。以来、はや12年が経過し、高校からの昼間大学進学率が一層上昇したこともあり、夜間主コースの存在意義が小さくなっているような受け止め方が一部にあるようですが、生涯学習の場として不可欠であることを再認識する必要があると思います。小・中・高校・大学へと続く進学競争のコースから何らかの理由で外れてしまったものに再挑戦の機会を与えてくれる場として不可欠であり、直面している高齢化・人口減少社会の中で、中堅社員に能力の再構築の機会を、熟年者に知的好奇心を満たす機会を与えてくれる場としてますます必要となるのであり、これを担うことは国立大学法人である新潟大学が社会に対して果たすべき任務の一つであると思います。夜間主コースの運営が新潟大学全体の社会に対する責任として再認識され、全学的な支援のもとで、一層充実した内容で運営されていくことを期待してやみません。



### 新潟大学を退任するにあたっての思い

■医学部保健学科教授  
池田 京子

看護職としての臨床に終止符を打ち、教育の世界に入ったのが新潟大学医療技術短期大学部でした。看護教育期間は、他大学の4年間を含め15年になります。生まれも育ちも上越市で、雪深い冬を嫌い東京で学び就職しました。しかし、目ぐるしい情報の渦に翻弄される日々疲れ、静かに学問をしたいと故郷に戻ってきました。新潟大学に赴任して最初に目にとまったのが中田瑞穂先生の「学問の静かに雪の降るは好き」でした。以来、座右の句として大切にしています。静かに学問の世界に浸りたいと願う私に、現実には厳しく容赦しませんでした。短期大学部から医学部保健学科に改組し、休むことなく大学院保健学研究科(修士課程)の設置準備と開設、1回生の入学・卒業と翻弄された11年間でした。

今、退任にあたり思うことは、苦しいこともありますが、それを糧に多くのことを学ぶことが出来たことに感謝しています。その道に長けた人材豊富な総合大学で教育の基本を学び、看護教育の未熟さを実感しながらも将来の課題が見えてきました。4月から終章となる第3の職場で、看護学の集大成をして仕事人生にピリオドを打ちたいと考えています。

最後に新潟大学のさらなる発展を祈り筆を置くことにします。短かくも長くもあった新潟大学に、別れ告げることにより一抹の寂しさがあります。ありがとうございました。



## 新潟大学への 想い ～旅立ちの日に～



### 今を大切に生きる

■医学部保健学科教授  
藤野 邦夫

10年前の体験が現在の自分にとって貴重なこともあれば、過去の経験や価値観が時代の変化で、新たな発想が必要なこともある。40歳以上年齢差が開いた若い学生と話しをしているとそのずれをよく感じる。ある日、学生にガリ版刷りの古い統計資料を見せることになった。コピー機やワープロが日常生活の中に浸透しており、ガリ版刷りとは何かさえ知らなかった。

新潟は、水害、地震、豪雪と自然災害続きである。おまけに広域停電さえ起こった。便利さと豊かさに慣れた若者は、危機管理に弱いのではと感じる。

私は古い人間だが、新しもの好きで秋葉原の電気街へはよく行く、街は若者が多く活気に満ち、多様な新製品が並んでいる。アマチュア無線の店がパソコンショップになり、ゲームソフト専門店に変化していく。4月から東京に住むが、暮れに110度BS・CS受信用のアンテナを揚げ、パソコンと接続可能な32インチ地上波デジタル対応の液晶テレビを買った。新潟の家には既に光ケーブルを引きインターネットは高速でIP電話もある。

単なる珍しい物好きでは困るが、スポーツ、読書、演劇、旅行などその人の価値観にあった「今を大切に生きる」ことが幸福なのだろう。



### 創造性を大切に

■工学部教授  
斉藤 義明

大学の使命は教育と研究（近年は管理運営、社会貢献も入るが）であり、知識の伝承と共に新しい知識を追加する業務が重要である。資源が極端に少ない日本はこれからはアイデアで勝負する必要がある。

私自身多くの特許を大学に寄付し、新潟大学で最も沢山大学所有の特許を取得している。

その経験からすると、独創性は自然に身に付くものでも無ければ、天才と言われる人たちだけの特権でもないと思う。過去の大発明家の手法を分析すると幾



実験中の筆者

つかのパターンがあることに気付く。これらの手法をいつも頭の中に入れて研究を行っていくと確かに創造性を活発にするのに効果がある。ただ、これだけでは駄目で、日頃から広い分野の知識を吸収し、整理し、いつでも活用できるようにしておくことも大切である。

社会的にニーズの高い或いはこれからニーズが高まって行くと考えられる「もの」、「事柄」、「現象」、「問題」等に対する解決策を見出そうと日頃考えていると、ある時、自分でも思いもよらなかった発明が可能になる。私の最近の発明は、以下のような方法である。情報化社会が秘密情報を簡単に解読する高速計算機を作り出し、社会がパニックに陥ることが予想される。この時、最も解読され難い手法の実現方法を編み出した。もしかすると大ブレイクするかも知れない。

皆さんも楽しみながら学問を進め、成果を特許で世に問うてみては如何であろうか。



### 農学部を 退職するにあたって

■農学部教授  
伊東 陸泰

1968年、新設された畜産学科草地学教室に助手として赴任、以来、大学紛争、五十嵐への移転、総合大学院の設立、学部改組等々、さまざまな出来事が続き、社会も変わりました。多くの学生を迎えて教え、共に学び、社会に送り、「アッ」という間に38年が過ぎていよいよ3月には退職です。専門分野では、家畜の飼料生産の場である「草地の密度維持機構」の解明に多くの学生・院生共々、実際のフィールドや実験圃場、或いは実験室で汗水を流してきました。山積みされた古い野帖を整理しながら、地味で多労な調査の連続に、その時々専攻生諸君がよく従って来てくれたことと、改めて感謝しているところです。

今、上辺だけの「勝ち組」が大きな顔で世の中を牛耳り、「負け組」をコケにするという風潮が蔓延しています。大学でさえ、トピック性と即効性がもてはやされ、最近は「中つり広告」の見出しになりかねない出来事も聞きます。じっくり本を読んで思索する雰囲気、根気よく自然を観察する余裕、筋道の通った議論を行う習慣が失われているように感じます。でも、本当の社会の発展、科学の進歩は、本質を究めた「実」のある蓄積の上にたって初めて可能であることに変わりはありません。何より大学は自由な雰囲気、地道に真理を求めてこそ価値があるところです。若い学生諸君には、目先の軽薄な動きに惑わされることなく、物事を深く学んで未来を見通す力をつけていただきたいと希望します。



## 新潟大学への 想い ～旅立ちの日に～



### 新潟大学を退職するにあたっての思い

■農学部教授

山本 仁志

昭和39年に新潟大学農学部林学科を卒業すると共に林学科運材工学教室にお世話になり、その後、今日まで約40年間お世話になりました。

この間、新潟地震、学科増設、農学部五号館火災、東大安田講堂に象徴される60年安保反対から大学紛争、新潟大学本部占拠、農学部本館占拠、五十嵐移転と社会情勢の変化から林学科の講座改組、学科改組、大学院改組、農場建物新築、演習林苗畑及び宿舍移転、そして2004年JABEE認定、教育・研究の発展のために古い殻から脱皮を繰り返し時代と共に今日に至っています。

このような中であって、古いものをぶち壊し、新しく構築されたものには、新しさと斬新さが光輝きます。しかし、古いものには過去に蓄積された重厚な、いぶし銀のようなものが感じられます。猪突猛進し、変化を求めることも時代の流れかも知れませんが、時には、立ち止まり「温故知新」の言葉を思い起こすことが必要かと思えます。

40数年間導いて下さった多くの諸先生方、卒業生・学生の皆様方の助けと支えによって今日を迎えられることに、感謝の念で一杯です。ありがとうございました。

皆様の今後の益々の発展をお祈り申し上げます。



### 退任にあたって

■農学部  
(附属フィールド科学教育研究センター) 教授

伊藤 道秋

1985年の春、北大農学部から農学部附属農場に着任し、以来21年になりました。キャンパスから40kmほど離れた村松が勤務地で、講義や会議には約1時間をかけて車を走らせませす。時間のロスは悔しいけれど、解決方法がありません。移動に使うマイカーのメーターはほとんど回り、私的利用を含め、年間2万5千キロが平均的な走行距離で、今までに地球を何回回したことかと考えたりします。何台もの車を乗りつぶし、地球温暖化に手を貸しながらの燃料消費にも、一切大学は経費的な支援はしてくれずじまいでした。この不遇の解決策もないまま、後任者に引き継がなければならないやりきれなさがあります。幸い、農場という教育研究環境で、学生と共に汗を流した実習は身体の疲れと反比例して快適で、身近な作物の生長や収穫の喜び、のどかに育む家畜たちの動きは大いに活力を与えてくれ、悪条件に落ち込むのを引き戻してくれました。現場にはフィールド研究を進めるのに相応しい多くの課題があり、目的を持った研究に取り組めたと考えています。全国の大学農場の連携は、研究連携においても成果を生み財産です。2001年改組で、農場教員が担う専修コースが誕生し、専攻学生の教育に苦心しながらも地域に根ざした研究と一緒に出来る喜びは大きいと言えます。今春、2期生と共に無事退任できる喜びを噛みしめながら、この地域総合農学コースが、新潟大学と共に益々発展することを願っております。



### あっと言う間の5年間

■理学部教授

中井 武

#### 先生方や学生達と楽しい日々を 過ごせたことに感謝。

短かくも実に楽しい新潟大での5年弱でした。5年前、東京工業大学定年の直前に、思いかけず新潟大からオファーをいただき、その年の8月に赴任しました。一年目は、計画ずみの5件の海外出張で殆ど不在でしたが、2年目には新築の物質生産棟に移り、研究室造りを始めました。以来、東工大の時よりもきれいで安全な研究室で、卒研究生や大学院生らとともに有機合成化学の研究をやってきました。3年目の秋にはカナダ留学中の田山君が助手として加わっていただき、研究活動もより活発になってきました。こうして研究室整備も仕上がった頃に定年を迎え、やや名残惜しい気がするこの頃です。

この間、学部と大学院では有機化学を、他学部の一年生には入門有機化学を講義してきました。大学生の学力がよく議論される昨今、本学の学生諸君の中には、資質の高い学生が比較的多いという印象です。ただ、真面目だけれども少々おとなしく自己表現の苦手な学生が多い感じもします。今後、優秀な学生が本学大学院で成長して、社会のリーダーとなってくれるものと楽しみにしています。

赴任中に本学も法人化されて、いろんな変化が一挙に起き、元々複雑であった学部／大学院組織や意志決定プロセスが益々複雑となり、今でもとまどうことが多い状態です。最近の学長選挙の混乱も、法人化への道遠しの感がします。早く小異を捨てて、全学をあげて法人化を実のあるものにしてほしいと願うばかりです。



### ご挨拶

■大学院医歯学総合研究科教授

板東 武彦

新潟大学教授を定年退職となり、大学院博士課程に入学以来、約40年間の研究生生活に区切りがつきます。新潟大学には、半分の20年近く在職しました。新潟は食べ物も良く人情も厚く住みやすいところであり、医学部には学問を好む雰囲気がありました。その中で、前半は動物実験を中心に立体視の基礎である「輻輳眼球運動やピント調節の脳機構」を研究し、後半10年は脳機能イメージング・自律神経研究を含み「人間についての応用研究」に踏み込み、企業と共同で活動したり、国際標準の策定に参画したりしました。学術的業績の評価は後世に任せるとして、本人は満足しています。

教育面でも、医学部は進化の激しいところで、何度かの抜本的なカリキュラム改訂とともに、新教育法を次々と取り入れ、FDもほぼ全教員が受けています。学生教員懇話会などを通じた肌理の細かい指導やカウンセリングについても組織をあげて行われています。その中で、大学院学生の指導も含めると、首まで教育研究に浸って立ち働いていた頃が、懐かしくまた、楽しい思い出となっています。教授を定年退職することを機会に振り返りますと、ありふれた感想ではありますが、社会や友人に生かされてきたという感じが深くなります。数々のご支援に値する活動ができたかどうか不安が大いなのですが、この区切りを機会に改めて皆様に感謝したいと思います。

## 新潟大学への 想い ～旅立ちの日に～



### 同じ釜の飯を喰う 解剖学実習と マクロ解剖夏期セミナー

■大学院医歯学総合研究科教授  
熊木 克治

医学部において、昭和56(1981)年6月から25年9か月、26回の解剖学実習を担当した。科学するということは正確な「観察」に基づく「所見」が基本となる。標準と変異の所見に基づき頭を使って考える「考察」によって形態形成の「物語」すなわち「原則」を発見できる喜びを目指した。レポートを課し小研究を試み、実習は毎年多くの成果を挙げる事ができた。教育と研究の一致を実践した。今流行のPBL, EBM, チュートリアル, 自己学習などは、いわゆる解剖学実習として以前からすでに実践してきたことと主張したい。

また臨床医学における「診察」、「鑑別診断」、最後の「診断」にも通じる科学の原点である。

マクロ解剖にノイエスなしといわれて久しいが、13回にのぼる企画、マクロ解剖夏期セミナー(新潟)では全国の若手解剖学者、大学院生、多くの医学部歯学部学生、加えてコメディカル分野からの参加があり、その意義と重要性を再認識すべく熱い実習と検討を行った。

チーム医療、インフォームドコンセント(説明と同意)、健康と医療問題への一般社会での意識の高まりなどを通して「解剖学」がドンドン一般の人々の中へも、ルネッサンスの波のように広がりつつあることを喜んでいる。

ダーウインの言葉「No one could be a good observer, unless he was an active theoriser」は「帰納法」、「川喜田二郎の野外科学、KJ法」にも通じる重要、有効な考え方で、われわれの目指す、単なる羅列、暗記ではない「考える解剖学」に一致する重要な指針といえる。

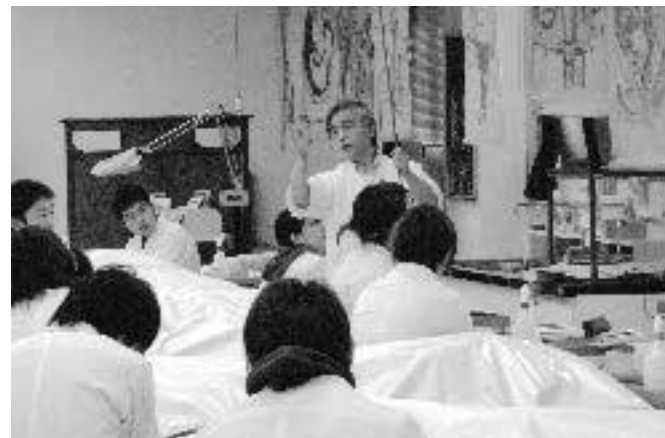
最初に、使用の栄に浴した、改装となった解剖学実習室、2006年



### 新潟大学 定年退職にあたり

■大学院医歯学総合研究科教授  
本間 信治

私の学生時代には、まだ、羽織袴で講義をされる教授もおられ、生理学講堂には、カイザー髭をたくわえた、歴代の生理学教授の写真が、掲げられていた。私は卒業後、1年のインターンを経て、すぐに第一生理学教室の助手として、神経科学の研究ができ、幸運であった。助手の籍は、他の教室に貸し与えていたものを返却してもらったもので、悠長な時代であった。3-4代目の教授の研究を支えてきた3人のベテラン技官がいて、実験、生理学講義の動物実験供覧、スライド、文献の写真複写、雑用なども手助けしていた。1-2教室単位で、桜の木や池のある中庭があり、花見ができ、実験材料の暮ガエルも放し飼いで、木造ではあったが、まさにDepartmentであって、現在のように全教室が一つのApartmentに同居していなかった。そんな環境でのんびりと、新潟ペー



スで研究できた。その後、東京医科歯科大学(1年)、セントルイスのワシントン大学(3年)、富山医科薬科大学(7年)、生理学研究所(共同研究、2年)などで研究、教育に従事、1984年、母校教授に召還され定年を迎えることになった。前任教授や、恩師の一人は、在職在任中に亡くなられたことを思うと、幸いであった。母校に戻り、いつ寝首をかつ切られるかわからないような状況はなくなったが、苦渋の末、神経科学の多くの恩師らの研究主題と異なる、胃電図(消化管の皮膚表面上からの電気現象)、胃電図マップ、ストレスと胃電図の研究にたどりつき、ストレスの胃電図反応の中枢神経系機序という、神経科学研究に回帰するところで、定年を迎えてしまった。定年最後の2-3年は、独立法人化、校舎改修に見舞われた。医学部もDepartmentから、大講座制のApartmentになり、基礎医学講座は削減を余儀なくされている。私が、担当する生理学第二講座は、戦後間もない、1954年に開講されたが、わずか50年あまりで幕をひこうとしている。現在の政治経済文教状況は、当時より悪いということであろう。しかし、大部分は、いわば、よき時代に研究、教育ができたことに感謝したい。



### 新潟大学を 退任するにあたって

■大学院医歯学総合研究科  
(附属腎研究施設)教授  
清水 不二雄

あつという間の25年余。新潟での生活が今迄で一番長くなっている。

当然色々辛く自責の念にかられることも多かったが、間違いなく概ね恵まれたものだったといえる。7年前になるが、当時の荒川正昭学長のご厚情で副学長という思いもかけない要職につけていただけ、本務は想定どおり荷が重すぎたが、他学部の魅力溢れる要人とお付き合いできたことも含めてかけがえのない経験をさせていただけたことを心から感謝している。肝腎の研究面でも良き同僚に恵まれて専門分野についての国際シンポジウムを新潟で開催できたことが一番嬉しく自分には出来すぎのエピソードであった。全学のオーケストラの団長時代には積年の念願事項であった東京



副学長当時 本人は左側



特集

## 新潟大学への 想い ～旅立ちの日に～

公演をサントリーホールという天下の桧舞台で実現できた。

英語で“卒業”を意味するCommencementはまた“始まり”を意味するということが良く引き合いに出されるが、新潟大学で培い新潟大学から頂いたエネルギーを元手にして新しい可能性を追求していきたいと念じている。ドジが多く老害をまきちらしつつある現状を鑑みると、成る程定年退職は必要で何とか曲がりなりにもその日にたどり着くことが出来れば、それはもう間違いなくおめでたいことなのだ実感している。それを可能にして下さったすべての方々に心から感謝し、第2の母校である新潟大学の益々のご発展を衷心より祈念してお別れのご挨拶にかえたい。本当に長い間有難うございました。



### 医歯学総合研究科の 退職にあたり

■大学院医歯学総合研究科教授

河野 正司

平成5年3月に新潟大学歯学部歯科補綴学第一講座へ赴任し、大学院部局化により講座の名前は大学院医歯学総合研究科摂食機能再建学分野と変わりましたが、本年3月をもって医歯学総合研究科の教授を定年退職となるまで、13年間にわたり大変にお世話になりました。

新潟大学における最初の6年間は、それまでに暖めてきたテーマを中心に研究と教育とに専念し、多才な教室員と楽しい毎日を送らせていただきました。咀嚼や発語などの顎機能が滑らかに行える義歯を患者さんの口腔内に装着できるようにと、顎運動を中心とした顎機能と全身の運動機能との関係について追求してきました。

次の4年間はそれまでの仕事に加えて、歯学部附属病院長としてその存在を地域社会に発信する仕事に携わり、続いて医病との統合という波の中でいかに歯科のアイデンティティを確立するかに腐心する毎日でした。このような改革の中で、その後の3年間は副学長として全学の運営という大変に重い仕事をさせていただきました。

この様な13年間につねに大学院生を中心とした多くの教室員の方々と研究活動を続けられたことが、私の「青春の終焉」を今日まで延ばすことが出来たのだと感じています。

無事仕事をやり終えることが出来たのは、歯学部の教職員の皆様、とりわけ摂食機能再建学分野(旧第一補綴)の先生方を初めとする、新潟大学の諸先生方による種々なお支えをいただけたからであり、深謝申し上げます。

法人化3年目に入る新潟大学がその存在意義を社会の中で高めて、さらに発展出来ますように祈念申し上げます。



### 来し方を振り返って

■脳研究所教授

田中 隆一

私が昭和40年に本学を卒業して脳神経外科学を専攻してから40年、教室の責任者になってからは25年という長い年月が流れました。今振り返ると、あつという間に過ぎ去った感があります。毎年、脳神経外科医を目指す若い教室員を迎えることができ、私自身が彼らの若さとエネルギーに鼓舞されつつ過ごした25年間でもありました。脳神経外科学はこの40年の間に顕微鏡手術、CT、MRI、脳血管内手術の導入など、それまでの脳神経外科の診療を一変させる技術革新が相次ぎ、われわれはそのたびに生涯学習を強いられました。その進歩の素晴らしさを実感し、メリットを享受することもできました。

大学の臨床教室には、高度医療の実践、学生教育と専門医の育成、臨床に還元される研究などが求められます。若い人達には、患者さんの立場に立って診療すること、得意分野や技を持った専門医になること、臨床上的問題を解決するための研究をすることを目指してもらいました。忙しい診療の合間に研究を進める難しさをいつも痛感していましたが、幸い意欲的な教室員に恵まれ、また学内外の多くの方々のご指導を得て、脳腫瘍や脳血管障害を中心にいろいろな研究を行うことができました。

定年を迎えるにあたり、これまで私を育ててくれた新潟大学の発展をお祈りするとともに、ご指導いただいたすべての方々に深く感謝申し上げます。



定年一年前の誕生日に 医局にて

特集

## 新潟大学への

## 想

～旅立ちの日～

## 卒業・修了する学生からメッセージ

入学から4年間・6年間、いろいろなことがありました。

新潟大学を旅立つにあたり、

卒業生・修了生からメッセージを集めました。

## 本日、天気晴朗なれど

■人文学部情報文化課程

高橋 陽子

文コミの根城、総合教育研究棟6階から望む日本海が私は好きである。2階、3階と上るにつれて、空と海を分ける青い帯が少しずつ姿を現してくるのが階段の踊り場から見える。それを眺めながら6階まで自力で駆け上がり、よろめきつつゼミ室に飛び込むことも少なくなかった(体力ない)。若干息を切らしたまま先生や仲間達との議論は踊る。

山に近い平野部の町で育った私にとって、あの光景は牧歌的ながら何がしかの夢想を誘うものであった。世界は広いんだぞー、目を開けー、と言われていた気がした。波頭が高く荒れた嵐の海も、青く凩いだ光る水面も、そこを進んでいく白い船も。大学の4年間で私に見せてくれた厳しさ、自由、新しい知識と経験の

兆し、それらをあの踊り場からの眺望は表していたように思う。晴れた日には水平線の向こうに佐渡の島影が浮かび上がる。この春、またひとつ遠くへと進み出ていく先の、あちらの天気はいかがだろうか。



旅行先にて友人と 本人は右側

## 卒業にあたって

■教育人間科学部学校教育課程教科教育コース国語教育専修

大滝 優果

この四年間を振り返ると、私はなんて幸せな時間を過ごしたのだらうと思います。私は、仲間にも恵まれ、環境にも恵まれました。まなび屋という活動を続けるなかで、本音で語り合える、信頼できる友達ができました。また、やりたいことに挑戦する機会も与えてもらい、多くの人の協力を得て実現させることができました。

まなび屋を飛び出して活動することもやってみました。そして、気付いたことは、勇気を出して一歩踏み出すと新たな世界が目の前に広がるということ、そして一歩踏み出すことはそんなに怖いものではないということです。

私は、まなび屋の仲間、ゼミの仲間、先生方、NPOの方々、家族・・・多くの人に支えられ、刺激を受け、

成長させてもらいました。私を取り巻くすべての人に心から感謝しています。ありがとうございました。

春には大学院に進学します。専門科目についての見識を深め、研究に励むとともに、自分らしく、2年間を充実したものにしたいです。



かけがえのない仲間と 本人は前から2列目左端

## 大学生生活を振り返って

■法学部法政コミュニケーション学科

添田 真由子

「大学生生活は人生の夏休みだ」。私がアシスタントをしていた賢人会議に講師としていらしたOGの先輩の言葉だ。今、大学生生活を振り返ってみると、本当にその通りだと思う。

私は陸上部に所属し、学部・学年を超えた幅広い交流をすることができ、そこで刺激を受ける出会いがいくつもあった。時には衝突することもあったが、一緒に泣いたり笑い合うことのできる仲間に出会えた。毎日の練習や大会の運営、イベント、コンパを通じて、その仲間の大切さに気付くとともに、自分の価値観や視野を大きく広げることができたと思う。

また、3年から始めた行政学のゼミでは、浜コンやゼミ旅行などのゼミ以外の様々な活動により、専門的な

知識はもちろんのこと、それ以上に多くのことを学ぶことができた。中でも、新発田市の条例検討会に参加したのが記憶に新しく、とても貴重な経験であった。

いつまでも続くと思っていた、この夢のような夏休みがもうすぐ終わりを迎える。この4年間、本当に充実した日々を過ごすことができ、人間的に大きく成長できたと思う。両親をはじめ、お世話になった全ての人々に感謝したい。



ゼミ生とのシンガポール卒業旅行 本人は右から2人目



## 大学生活を振り返って

■経済学部経済学科  
江口 麻衣子

大学生活は、何にでも挑戦することができる貴重な時間である。

大学4年間は、楽しさ故にあっという間に過ぎさった。この4年間、アルバイト、ゼミ、サークル、資格試験、就職活動、旅行、飲み会そして飲み会と、色々な事をそつなく、だらだらこなしていた気がする。が、今振り返ると、メリハリのある、楽しい学生生活を過ごせた。そんな生活を通して卒業する今、知らず知らずに、学べたことは沢山ある。

特に対人関係では、様々な価値観をもつ良い友人に出会えた事を誇りにささ思ふ。良くも悪くも、刺激し合える仲間に会え、私の中の視野や価値観も広がっていった。そして、沢山の楽しい思い出も…☆

大学生活では、思う存分、何でもできる貴重な時間が沢山ある。失敗も後悔も多々あるが、全部含めて、自分が良しっと思ひ行動した事は、自分を成長させてくれた貴重な経験に繋がったと思う。

新潟大学で過ごせて良かった。本当に、皆、有り難うっ!! また会おうねっ!



本人は右側

## 成長するためのヒント

■医学部医学科  
櫻井 可奈子

6年が終わってしまった。あっという間だった。でも6年という月日は決して短い時間とは言えない。入学式のあの日の自分と比べて、今の私は少しは進歩しているだろうか…自信がない。

大学生活で多くの人とのお会いがあった。様々な人生を過ごしてきた人と様々な話をし、心に残るたくさんの言葉や場面とお会った。特に思い出されるのが臨床実習でお会った患者さんたちの顔だ。自分自身の体や心に悩みを持ちながら必死に頑張っている患者さんが、他人である私に対して、いたわりの言葉をかけてくれた時、失敗を励ましてくれた時、温かい気持ちに触れた時、私はもっと成長しなくてはいけないとつくづく感じた。もっと強い人間にならなくてはと反省する。

患者さんは、人生の先輩であり、先生であり、本当にたくさんの事を学ばせていただき感謝の念でいっぱい。本当にありがとうございました。6年間で自分がどのくらい成長したかは実感としてつかめないが、自分が成長するためのヒントは、身のまわりにたくさんちりばめられている。一つ一つの思い出を大事に温めて、これからの人生に生かしていこうと心に刻む。



勉強会の仲間達と…(ボンの前) 本人は左から2人目

## 大学生活の思い出

■理学部地質科学科  
五十嵐 雄大

4年間、未熟な私を支え続けてくれたのは、何と言っても地質科学科の素晴らしい仲間達でした。人数が少なく、泊りがけ実習が多かったため、学科の仲間とは非常に親しくなれました。試験期間には、みんなで徹夜で大学に残って、試験勉強やレポートに励みました。また、何かにかこつけては誰かの家に集まり、飲みながら語り明かしました。他にも、1年秋、初の泊りがけ実習。2年春、「地学ハイキング」。3年春、中国～四国への見学旅行。3年夏、1ヶ月かけた実習。どれも、大切な仲間と過ごした大切な思い出です。仲間達は私に、かけがえのない、自分の居場所を与えてくれていました。

素晴らしき仲間達に、この場を借りて感謝の言葉を

言いたい。みんなに会えて本当に良かった。辛いことも、みんながいたから乗り切れた。私はみんなを生涯忘れない。縁があれば、またどこかで飲み明かそう。仲間達よ。本当に。ありがとう。



本人は右側

## 大学生活を振り返って

■医学部保健学科  
原田 正紘

国家試験を間近に控えた今、卒業するということが急に現実味を帯びてきました。ちょっと前までは卒業生を送る立場だったのが、気づけばいつの間にか送られる側に… 4年間で本当に短く感じられます。

思い返せば私の大学生活は、部活動なしには考えられないものでした。入部したての頃は勉強の合間に練習だったのが、いつの間にか練習の合間に勉強になり、学校にいるより道場に居る時間が多い日も数知れず…。学生として褒められたものではないですが、これほど熱中できることに会えることができ本当に良かったと思っています。また、部活動を通じて個性的な先輩や後輩、何でも話せる同輩に出会うことが出来ました。部の仲間と過ごしている

間は、どんなに学校生活が忙しくても時間を忘れることが出来るひとときでした。

私が卒業をむかえて、こんなにも充実した気持ちでいられるのは、部の仲間のおかげだと思っています。みんな本当にありがとう。



学部戦後 本人は前列右から2人目



## 旅立ちのとき

■歯学部歯学科  
築山 友紀

振り返ると、あっという間の6年間だった。桜満開の入学式でちょっぴり緊張しながら、これからどんな6年間を過ごし、卒業の頃にはどんな大人になっているのだろうと思い描いたものだった。それからの日々は、良き友に巡り合い、そのときそのときを精一杯、楽しんで過ごすことが出来た。試験前に皆で一緒に勉強したり、歯科技工操作を教えあったり、夜遅くまで実験したり、お酒を飲んで騒いだりと沢山の思い出が蘇ってくる。各学年50～60人前後という人数もあり、みんなとても仲が良かったと思う。特に出席番号が前後の人とは、歯科相互実習で歯科麻酔の掛け合いもしたほどだ(笑)。そして気付けば、ああだ、こうだと言いながら、着実に歯科医師への階段を1段ずつ

登り、ここまで来ていたことに感慨を感じる。これから歩む道は人それぞれだけど、いつまでも切磋琢磨しあえる仲間であってほしいと思う。36期バンザーイ!



歯学部女子ロッカーにて 本人は前列右から2人目

## 大学生活の思い出

■農学部農業生産科学科  
渡邊 千香

新潟大学での4年間で振り返ると、なんと濃い時間だったのかと思う。とくに2年生になってからは本当に楽しい大学生活だった。2,3年生の間は部活にバイトに遊びに多くの時間を使い、4年生になると就職活動、教育実習、卒業論文におわれて忙しい日々を暮らした。4年間の中ではもちろんつらかったこともある。1年生のときは不慣れな1人暮らしで心細かったし、4年生のときは卒業論文の勉強がうまくいかずによく悩んだ。つらいときには友人が救ってくれた。印象深いのは4年生のときに勉強がうまくいかず、つい「私はあまり勉強に向いていないから、大学には来ないほうがよかったかもしれない。」と友人にこぼしてしまった時の一言である。「本当に大学に来ないほうがよかつ

た? 大学に来て楽しくなかった?」友人のその言葉によって、忘れていたたくさんの思い出がよみがえってきた。新潟大学に入ってよかった、友達にあえてよかった、いい思い出がたくさんできてよかったと。ここで過ごした4年間は今後、私にとって大きな糧となると思う。



本人は後列左端

## 四年間を振り返り

■工学部情報工学科  
兼子 陽市郎

新潟大学に入学して4年が経ち、卒論やこの原稿を書いている自分を見詰め直してみる。この4年間で私は、本当に様々な知識や経験を得ることができた。それはやはり多くの人との出会いがあったからだ。これまで接してきたあらゆる人との交流は、自分を様々な面で成長させてくれた。学科、部活動、私生活、それぞれ違う環境での体験や人との交流があったからこそ今の自分があると思う。そこでは自分の財産となる思い出も作ることができた。また、それらの環境において学んだ1つの教訓がある。何をやるにしても物事に対する意欲を持つことの大切さである。この意欲を持つという姿勢があることで、その分野における伸びを促進させてくれるということを実感した。

私は卒業後大学院に進学するが、この教訓をこれからの生活で十分に生かしていけるように意識し、残り少ない学部生としての生活を有意義に過ごしていきたいと思っている。



軽音楽部の夏合宿にて 本人が一番後ろ右から3人目

## たくさんの感謝を胸に

■大学院教育学研究科学校教育専攻障害児教育分野  
武田 守宏

2年間の大学院生活も終わりを迎えようとしている。思えば内容の密な2年間だった。私は大学院1年生より、教育相談や学習支援ボランティア、軽度発達障害のある子どもの会でのボランティアなどに携わってきた。この中で、私は様々な子ども達や親御さん、同じ分野に関わる方々と出会った。これらの人々と活動を共にする中で、私はたくさんの方に気付くことができた。例えば、それは一人一人の個性に合った支援を実践することの大切さ、他者を敬うことの大切さである。これらの出会いや経験が、院2年間で私を大きく育て、飛躍させてくれたと感じている。

していきことになるが、先生から教えて頂いたこと、先輩や友人、後輩から学んだこと、そして上記のことを胸に新たな一歩を踏み出したい。今まで自分を温かく見守り、接して下さった方々、ありがとうございました。そして、父親を亡くして以来、支えあってきた母親と兄へ、……ありがとう。



本人は後列左から3人目

## 修了にあたって

■大学院保健学研究科  
村田 冬樹

本当に多忙な2年間ではありましたが、わからなかったことを明確にする、最先端の研究に関わっている、研究に対して責任を負う、という経験が今後の役立つのではないかと思います。とりわけ本大学院の先生方や工学部の方々には、多くのご支援、ご助力を頂き本当にありがとうございました。

ときに、新潟は豊かな自然に囲まれ、四季を最高に満喫できる素晴らしい地域である反面、一昨年の水害や大地震に続いて、昨年末の大停電と昨今はたくさんの災害がありました。おそろし新潟...新潟市も来年4月には日本海側初の政令指定都市になるとい

うことで、自然災害にも負けず地の利を生かした新しい新潟を新潟大学の学生、卒業生、教職員のみなさんと育てていきましょう。



本人は前列右端

## 一生の思い出

■大学院現代社会文化研究科  
盧 守助

ほぼ6年前、私は上海の出版社を退職し、留学のため日本へ来ました。当初は日本語が分からないこと、また経済的困窮のために、研究に専念できず、苦境に陥りました。私は自分が順調に修了できるかどうか疑問を抱きました。しかしそのとき、人文学部の先生方が私に手厚い配慮と援助を与えてくださり、私は深く心を打たれました。6年間に、懐かしく思うことは数えきれないほどです。その中でも、最も忘れ難いのは指導教官、井村哲郎先生から指導して頂いたことです。論文を出す都度、先生は丁寧に細かく添削して下さいました。日本語の表現を除いて、論理的、研究方法について具体的にコメントされており、その一面の赤ペンの筆跡を見て、私はいつも魯迅先生の名作「藤

野先生」を思い出しました。魯迅先生と同様に、私は日本の先生方からの恩恵に感銘しています。日本に留学した経験は私の一生の宝であり、一生の思い出でもあります。帰国したら、私はこの6年間の感想を中国で語りたいと思います。



佐々木充先生のゼミ教室にて 本人は後列真ん中

## Living in Japan

■大学院自然科学研究科  
Evelyn Matekwor Ahulu

"How did you become interested in Japan? And why Japan?" These are two questions people (both Japanese and non-Japanese) frequently ask of me.

I am Evelyn Ahulu from Ghana. After my experiences with my high school mathematics teacher who happened to be Japanese, I became more interested in learning about and possibly even visiting Japan during my lifetime; little did I expect it would happen so soon. Thanks to the Japanese government for giving me the opportunity to study here for the past 5 years.

I have been through many experiences, faced new challenges, met many different people and learned many things. The people of Japan are very friendly, polite and kind. Everyone has tried their best to make life very easy and comfortable for me and for that I am really grateful. Most of the things that I was not familiar with such as eating raw fish have now become a part of me. In fact I find raw fish a delicacy and look forward to introducing it to my friends and family when I go back home. I liked the cleanliness, serenity, calmness, silence and feeling of safety as well as the way things are competently and promptly taken care of. In school, I discovered that both students and lecturers are extremely dedicated, active and outgoing most of the time and also enjoy to socialize. I found it amazing that in spite of being one of the leading countries in technology, tradition is still alive in today's modern Japanese society, and that is one of the reasons why I like Japan. There is a respect for the old way of doing things as well as respect for old age and for each other. This is what really has me interested in Japanese society. In a way it identifies with the way of doing things in

my country. I have throughout my stay been very enthusiastic about learning Japanese language and I am very happy that I am able to survive most situations without the need of an interpreter.

Aside studying I have also had many opportunities to see other parts of Japan. I have been to Okinawa, Kyoto, Fukuoka, Shimane, Himeji, Sado island and Osaka. The landscape, the colours, particularly the mountains with snow on their tops and beautiful forests are so different from home and very therapeutic. I enjoyed going out with my lecturer and other students to collect soil samples etc. from Nagaoka because of the wonderful company and beautiful scenery along the way. I found it amazing at how much of the Japanese heritage has been preserved. My favorite site was Nanzen-in in Kyoto. There was something about the place that lifted my spirit high above the pure green tinted leaves of the garden trees. The pond rippled gently with each tap of the overhanging branch and seemed to echo the age and wisdom of its wooded wonderland. The magnificent castles such as the Himeji-jo in Himeji, and Matsue-jo in Shimane are a few of the fascinating sites I have been privileged to see. In Okinawa the vegetation and climate made me feel like I was back home in Ghana and that was intriguing.

Generally I have enjoyed my stay here in Japan very much. Although I shall soon go back home, I think life here will be in me for good and I shall share my experiences with others who might not have the chance to ever visit. Thank you all for your kindness.



本人は右側

## 新潟大学を卒業・修了するにあたっての思い

—何より成長が嬉しいことだ—

■大学院医歯学総合研究科地域疾病制御医学専攻  
曹 鵬宇

入学の喜びが昨日のこのようにまだ沈みきれないうちに、卒業の感慨が既に芽生えてきた。それほど長く思った4年間の月日はあっという間でした。“順調に卒業するよう”—入学当初のその強い願いと随分苦労し続けた夢もない奮闘の日々は決して忘れたこともない。学問という世界は、あまりにも博大そして厳しい世界だということもその短い試練から覚悟してきた。“あなたは研究者として世界に通用しない!”と何度も先生に叱られた。でも、今振り返ると8本の論文を出せた私にはその叱りがなければ今に至る成長はないでしょう。先生、本当に有難うございました。

まだまだ未練だと深く感じるのですが、責任感を感じ始める三十代の私には決して躊躇うことが許されない。医療において中国と日本、そして中国と米国の格差を一日も早くなくすために、先進である国々の健康水準を追いかけ、追い越すために、今から、世界に通用する一人前の研究者として全力を尽くして行かなければならない。ずっとご指導応援してくれた先生方、是非これからも見守り続けてください。

新潟大学でさらに成長ができて何より嬉しく思い、感謝したい。間もなく日本を去っていくと思えば思うほどそれだけ親近感を感じています...



教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校教育課程美術専修の卒業生たちと、大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の修了生たちによる卒業制作展が開催されました。学生生活の中で多様な芸術のあり方を学んできた学生たちの集大成となる作品を展示。多くの方々に来場し、学生たちの作品に関心深く鑑賞していました。



# 制作展

# 第54回卒業

表紙掲載作品

## daily

■ 関口 優希 ■ 教育人間科学部 [洋画]

「好きで近くにおいたのに、居心地の悪さを感じる」金魚を飼った時に感じた気持ちがこの作品を制作するきっかけになりました。半透明の布でできた家の壁や屋根に拡散していく何匹もの金魚。作品の中に鑑賞者が入ることで、生活の中で自分が感じている違和感のようなもの、心地がいいのか悪いのかといった微妙な感覚を感じてもらえたら、と思いながら制作しました。



※作品全体に広がる金魚は表紙をご覧ください。

2006年  
2月6日~12日  
■  
新潟県民会館  
3階ギャラリーA



## みをまかせ

■ 早川 友梨 ■  
■ 教育人間科学部 [彫塑]

素材から伝わり、感じとった流れ、動きを大切に制作しました。渦や波をモチーフに制作した3点を配置することで生まれてくる流れ、動きを表現しています。会期終了後は内野町の静田神社に、永久設置する予定です。内野町はこれらの作品を公開制作した場所

であり、住民の方々との思い出も多く、作品も私もつながりが深い場所です。未永く親しまれることを願っています。

## 徒花咲ク百二ノ枝

■ 古澤 枝里 ■ 教育人間科学部 [彫塑]

水は常に歩き続ける。  
今在る水はすでにそこにはなく、しかし何処かに存在し、  
絶えず歩き続けている。  
何故かと問う。  
水、曰く  
うつくしくあるために、と。

そんな水の存在をこの作品の周りに感じ取って欲しい。



## シグナルとスケッチ vol.2

■ 半間 道子 ■ 大学院教育学研究科 [洋画]

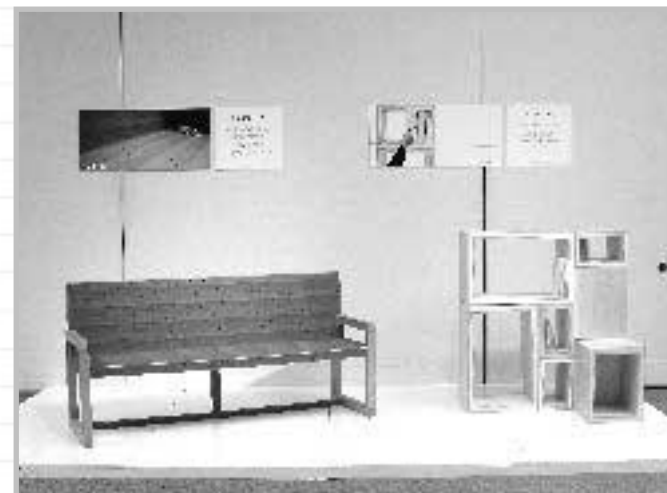
写真を撮る時、撮影者はその場に立ち合い、肌でその光景を感じ取っているはずなのに、それを後日プリントになって眺めた時に、撮った時点では気付かなかったものが印画紙に刻印されていることがある。「その場で目の当たりにした被写体」と「仕上がった写真から見る過去の印象」この2つのズレに基づき、私たちが包括する日常のあらゆる現象を確認し、またはそれらを追いながら作品化しようと考え、修了制作に取り組んだ。



## still life , move life

■ 高田 佳恵 ■ 教育人間科学部 [デザイン]

"still life"とは「静物」、"move life"は「動く物=人」を意味します。  
傾斜により本が片方に寄り、ばらつかない本棚"haco haco"と、有孔の座面により吸音・吸湿をもたせた椅子"on the off"を展示しています。





# 全学講義開講

学生の総合的な知見を高めるため、学外から講師を招いて行っている全学講義。

平成17年度に行われた早稲田大学・池内了教授の「宇宙はどこまでわかっているか」と、

同志社大学・奥田昌道教授の「民事裁判における最高裁判所の法形成」を紹介します。

## 全学講義「宇宙はどこまでわかっているか」

- 2005年12月14日(水) 15時30分から17時まで
- 総合教育研究棟E260
- 講師／池内 了(早稲田大学国際教養学部教授)

基礎科学の学問分野でも、とりわけ多くの学生を魅了する分野は「宇宙」の科学です。だれにでも一度は夜空を見上げて、宇宙の果てに思いをめぐらせた経験があるものでしょう。神話から現代宇宙物理の最先端を語らせるにはこの人以外にはいないというほど、歴史、文学と科学を融合した話には定評がある池内了教授の講義でした。

池内教授は、宇宙や銀河の起源と構造の研究をすすめるとともに、科学者の倫理や環境問題にも多くの提言をしています。また、文学への造詣も深く、科学と文学を結びエッセイストとしても活躍しておられます。文系の学生でも講義の中身を堪能できる「全学講義」めざして池内教授に宇宙の科学を依頼した所以です。

雪の舞う寒い日でありましたが、聴講生は250人にも及びその期待は大きなものであったことがうかがわれます。期待にたがわず、20世紀までの人類の宇宙認識の歴史が動的に辿られ、21世紀の宇宙論の発展が示唆されるものでした。古代の宇宙観からハッブルの膨張宇宙の発見、そしてビッグバン宇宙への発展、その深化、最近の観測結果である「宇宙背景放射」と「宇宙の加速膨張と暗黒エネルギー」が分かりやすく展開されました。

講演終了後、聴講した学生からの質問が何件も相次ぎ、講義時間が大きく超過したため質問を打ち切るほどでした。以下に講義の項目を示しておきます。



### 1 宇宙論の歴史

- 神話から天動説へ
- 無限宇宙の系譜
- 天動説から地動説へ
- 「星雲」仮説
- 西と東の宇宙観の対比
- 銀河宇宙の確立
- 「無数の太陽」の発見

### 2 膨張宇宙からビッグバン宇宙へ

- 宇宙膨張の発見
- ビッグバンのシナリオと3つの証拠
- ビッグバン宇宙
- 宇宙背景放射の発見

### 3 ビッグバン宇宙の深化

- 宇宙の大規模構造
- 宇宙背景放射のゆらぎ
- ダークマター問題
- 宇宙の加速膨張

### 4 人々の宇宙はますます拡大する

- 太陽系外惑星の発見
- 時空の果てにせまる

また、全学講義後、理学部棟において、「科学は終焉するのか」というタイトルで、21世紀の科学のあり方について、池内教授の講演と懇談がありました。全学講義に引き続き参加した数多くの学生・院生で、議論が沸き熱気にあふれるものとなりました。

(文責:理学部物理学科 教授 谷本盛光)

## 全学講義「民事裁判における最高裁判所の法形成」

- 2005年12月2日(金)
- 講師／奥田 昌道(同志社大学法科大学院教授)

昨年12月2日、奥田昌道先生をお招きして、「民事裁判における最高裁判所の法形成」というテーマで講演をしていただきました。奥田先生は日本を代表する民法学者であり、また、平成11年4月から3年半にわたり最高裁判所の裁判官を勤められ、現在は同志社大学の法科大学院において法曹の育成にあたっておられます。今回の講演も、民法学者として、最高裁判所裁判官経験者として、そして法曹育成に携わる教育者としての観点からお話をしていただいたもので、聴講した学生・教員にとりきわめて有意義なものでありました。

奥田先生はユーモアも交え、最高裁判所の裏話的なお話も含め多岐にわたる事項につき講演をなさったのですが、紙幅の関係上、要点のみをここで紹介いたします。



最高裁判所が果たす役割は、3つのものがあります。1つ目は、憲法問題の最終的な判断を下すという、「憲法の番人」としての役割です。2つ目は、下級裁判所の判断が分かれている場合に、最高裁判所としての解釈を示すことにより、判断を統一するという役割です。法律はいくつもの解釈が可能ですが、一方で裁判所として統一した判断がなされる必要もありますので、こうした役割があります。3つ目は、新たな法規範を定立する役割です。こうした役割は下級裁判所も担いますが、下級裁判所は最高裁判所の判例に事実上拘束されますので、最高裁判所が法規範を定立することが必要になります。

とりわけ民法においては、法律自体は法制度の骨格部分のみを規定し、細部を規定しないことが多く見られます。こうした部分につき、民法に明示的に規定されていない法理、民法に予定されていない法制度の創出など、判例による法形成が行われてきました。

もっとも、判決は本来的には個別具体的な紛争解決のために裁判所が下す判断でして、その判断中の規範は、先例として事実上の拘束力を持つにすぎません。これに対し、法律の改正といった国会の立法は、施行された日から全国一律に、全国民に対して妥当する普遍性を有します。

非嫡出子の法定相続分が嫡出子の半分とされている民法の規定が、憲法の「法の下での平等」に反しないかが争われた事件において、最高裁判所は合憲の判断を下しています。この判決は「右立法理由との関係で著しく不合理であり、立法府に与えられた合理的裁量判断の限界を超えたものということができない」としています。これは、あくまで事実的拘束力を有するに過ぎない裁判所の判決による法形成を抑制し、国会の立法による解決を待つ態度を示したものとといえます。



判例により法形成がなされた事例としては様々なものがありますが、最近の事例としては、私も関与したものですが、抵当権に基づく妨害排除請求権を認める判断を下したものがあります。抵当権は、担保のために不動産の交換価値から優先弁済を受ける権利であり、原則として、所有者の使用・収益に干渉することはできません。従来の最高裁判所の判例においても、妨害排除請求権は認められませんでした。しかし、第三者に抵当不動産を不法占有させることで競売を妨害する事例が多く見られたこともあり、平成11年の最高裁判所判決においては、抵当権者は所有権者の妨害排除請求権を代位行使できる旨、判令することとなりました。抵当権の原則や従来の判例への配慮から、あくまで代位行使という構成をとったわけです。もっとも、「なお書き」として、不法占有により抵当権者の優先弁済請求権の行使が困難になるような状態があるときは、抵当権に基づく妨害排除請求として排除を求めることも許されるとしております。これは、以後はこうした主張をして欲しい、という最高裁判所のメッセージでもありまして、実際に平成17年の最高裁判所の判決におきましては、そうした当事者の主張を受けて、抵当権に基づく妨害排除請求を認める判決を出しています。

以上、奥田先生には、興味深いテーマにつき分かりやすくお話をして頂きました。また、講演の端々で、法学部生として、また法科大学院生として、どのようなことに気をつけて学習をすればいいかのアドバイスも頂きました。この場をお借りして、感謝の意を申し上げます。

(文責:法学部法学科 助教授 岡田昌浩)

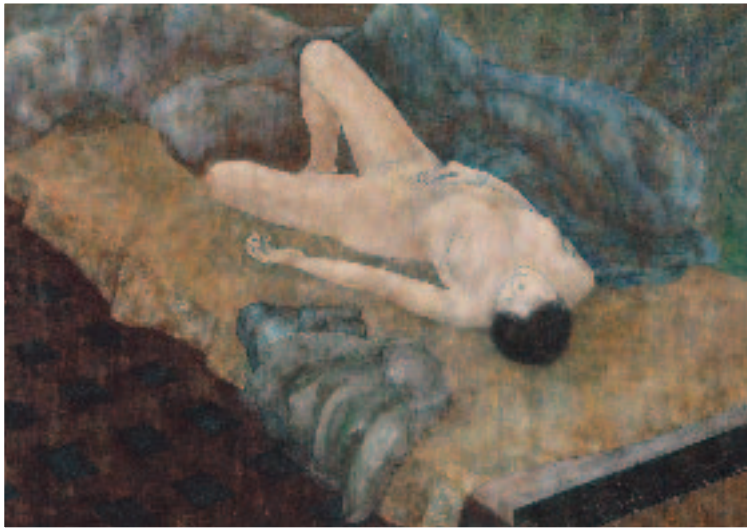
# 卒業制作展



## 蓮

■ 石黒多恵子 ■ 教育人間科学部 [日本画]

自然は雄大でとても私には描ききれませんが、でも私は自分なりに自然の美しさを少しでも絵画という形で表現したいと思いキャンバスと向かい合ってきました。蓮が風に揺れ、暖かい初夏の空気の中で青々と開くその様は見ていて心地よくなります。私はその心地よい空間を画面に再構築しようと試みました。学生最後の数ヶ月、自分の好きなものに没頭できた幸せな時間を「蓮」を通して得ることができました。



## 22才の休息

■ 二瓶理恵 ■ 教育人間科学部 [日本画]

この作品は卒業制作という締め括りに今の自分を残したいと思い、描いたものです。(モデルは自分ではありませんが。)私の部屋は寒いので、ほとんどの時間をふとんの中で過ごします。その強烈な、そのまま溶けそうな温かさから生まれた表現です。私は多分この先この絵を見る度に制作の苦しさや大学生活そのもの、22才の自分を思い出すでしょう。私にとって意味のある作品です。

### 広報委員会第1部会

部会長・編集委員長

寺田真人(医歯学総合病院)  
TEL 227-2975 tera@dent.

委員

石坂妙子(教育人間科学部)  
TEL 262-7116 ishizaka@ed.

岡田昌浩(法学部)  
TEL 262-6545 okada@jura.

高山 誠(経済学部)  
TEL 262-6557 takayama@econ.

竹内照雄(理学部)  
TEL 262-6346 takeuchi@math.sc.

牛木辰男(医学部医学科)  
TEL 227-2058 t-ushiki@med.

川瀬知之(歯学部)  
TEL 227-2927 kawase@dent.

谷口正之(工学部)  
TEL 262-6716 mtanig@eng.

田山英治(大学院自然科学研究科)  
TEL 262-7741 tayama@gs.

横山峯介(脳研究所)  
TEL 227-2163 myoko@bri.

岩本義男(学務部長)  
TEL 262-6080 iwamotoy@adm.

事務局(学務部)  
TEL 262-7337 FAX 262-7516

E-mailのアドレスは、  
niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。

■新潟大学ホームページ■

<http://www.niigata-u.ac.jp/>

【新大広報 Back Number】[http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/pr/c\\_forum/](http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/pr/c_forum/)

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見ることもできます。また、学務部学生生活支援課で受け取ることもできます。



新潟大学広報誌

Niigata University  
Campus Magazine

新大広報



2006 早春号

編集・発行／新潟大学広報委員会・新潟大学学務部  
印刷／第一印刷所